



戦後イギリス経済の成長と循環

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 浩一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002402

戦後イギリス経済の成長と循環

佐藤 浩 一

一、序

第二次大戦によつて大きな被害をうけた英国経済が、戦後十年において示した歩みは極めて大きいものがあつた。その成長のあとをみるならば、その率は戦前の一・九%にくらべ、ほぼ三・四%という戦前のそれをしのぐものである。

(第1表)しかしその過程においては順調に上昇を示したのではなく、五二年にその上昇率は一時下降し、後再び上昇を示している。戦後の十年という短い期間をみてこの成長率の下降の時を不況とする景気循環が、存在していたと断定することは勿論出来ない。しかしまた他方において、全体として成長の途を辿つたこの過程をみて、英国が何の経済的な危険もなく、この十年を過してきたともいえない。むしろ逆に、周知の如き度々の英国経済の危機が叫ばれてきた事は、単なるこの成長の図表からは伺いしることが出来ないのである。しかし吾国同様、貿易に依存することの大きい英国経済を考えるならば、英国経済の危機のよつてくるところが貿易の面よりくるそれであることが十分伺われ、吾々が国際收支尻の激しい変動をみるとき、このことは一そうはつきり示される。(第1図)

第1表 英国経済の成長

	国内総生産高 100万ポンド	実質国内総生産高指数 1948=100	成長率
1946	8,024	95.2	
1947	9,364	96.2	1.1
1948	10,379	100.0	4.0
1949	11,099	104.5	4.5
1950	11,666	108.9	4.2
1951	12,785	111.4	2.4
1952	13,861	109.8	-1.4
1953	14,805	115.0	4.7
1954	15,718	121.9	6.0
1955	16,784	127.6	4.7

戦後イギリス経済の成長と循環

国民所得白書 1953.54.56. }より算出
Annual Abstract of Statistics 1956

赤字の特に大きい四七、五一年の二度の危機のほか、四九年、ポンドの切下げという事態の中には喜んで英国経済の歩みは決して容易なものではなかった。そして英国経済の諸政策は常にこの国際收支の均等を維持するという点に集中せられてきたといえよう。そこで英国経済の戦後十年の歩みをみるにあたって先づ国際收支の動きを概観し、この国際收支を中心として国内経済が如何に動いていったかをみてみよう。

吾々は、終戦直後より四七、四九年の危機をのりこえ、一応戦後の回復をなした一九五〇年までと、朝鮮動乱によって起された世界的軍備拡張の中において、五一年の再度の危機を突破し五五年の世界的繁栄期までの二つの時期に戦後の歩みを区分しよう。前者は労働党政府下、戦後の激しい世界的インフレの中における危機であり、後者は保守党政府下、対外的要因からくる危機であった。これら危機の直接的原因が何であろうと、貿易依存度が戦前より高くなつた英国経済は、世界経済の影響によつて常に左右されてきたし、また今後とも強く左右されるであろう。

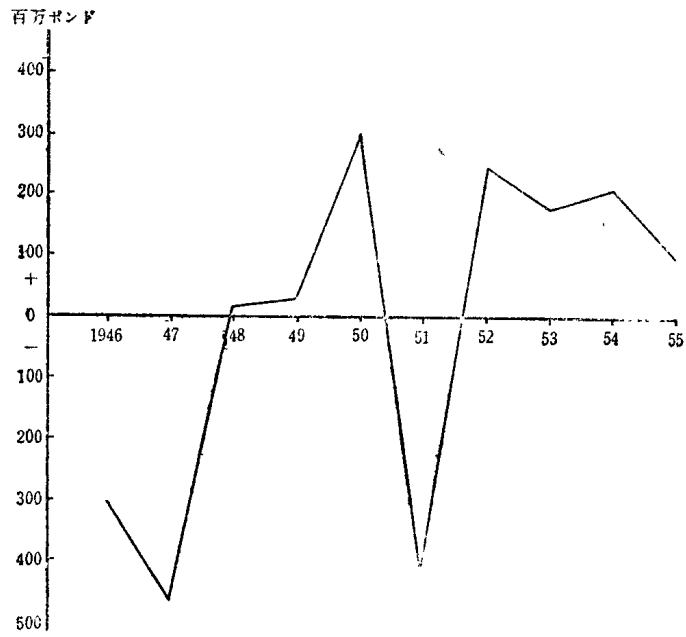


Fig. 1. 国際収支—経常勘定収支戻の推移 1946~55.

十億ポンド以上のものが売却せられた。ここから生ずる所得の大部分が英国の戦前輸入代金に支払われていたものである。

- ② 新海外負債、新しい対外負債は総額三十億ポンドに達した。
- ③ 交易条件、戦後の著しい輸入原材料価格の騰貴のため、一九四八年には一九三八年におけると同量の輸入のためには二割増の輸出がなされねばならなかった。
- ④ 輸出の減少、一九四四年戦時中には輸出の減少は一九三八年のその1/3以下であった。

二、 対外貿易と国際収支

(一) 大戦の影響

今次大戦における英国の国力の損失は、国内における爆撃その他による生産力の損害をはじめとして、対外投資収入や手数料、保険料の減少、船舶の激減、輸出市場の喪失等、その総額は百億ポンドにまで達したと云われている。このうち英国々内の資本の喪失は三十億ポンドと評価せられている。この様な結果は英国の財政上、貿易上の地位を著しく変化せしめたことは言うまでもない。今それらを列挙してみると、次の如きものがあげられる。

- ① 海外資産の喪失、戦時中、戦費調達のために、海外投資のうち

⑤ 金・ドル保有の減少、実質価値は戦前のレベルの約半分までに減少した。

⑥ 世界的ドル不足、戦争による種々の損失の結果、特に北アメリカに対する依存の割合を増大せしめ、非ドル諸国によるドル獲得は、アメリカ、カナダよりする供給に対する支払いには不十分であった。

かかる戦後の荒廃から立ち上るために、英国は緊急物資、サーヴィスの輸入は不可避であり、そのために輸出貿易の急速な拡充が喫緊の問題であった。そこで先づ吾々は終戦時より、「戦後の復興当面の事業を完成したとはつきり云えるようになった」（一九五〇年までをみてみよう）。

第 2 表 イギリスの国際収支—經常勘定 100万ポンド

項目	1934/38	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
	年平均										
入	796	1,082	1,560	1,794	1,978	2,385	3,491	2,944	2,887	3,009	3,413
輸出	531	917	1,145	1,602	1,841	2,250	2,748	2,827	2,670	2,817	3,061
貿易収支	△ 265	△ 165	△ 415	△ 192	△ 137	△ 135	△ 743	△ 117	△ 217	△ 192	△ 352
貿易外収支	215	△ 133	28	193	168	433	336	243	292	347	205
軍事援助							4	121	102	50	44
定収入不足											
經常勘定差引	△ 50	△ 298	△ 443	1	31	300	△ 403	247	177	205	△ 103

△ 輸入超過を示す。

1955は暫定。

経済白書 1954, 1955, 1956.

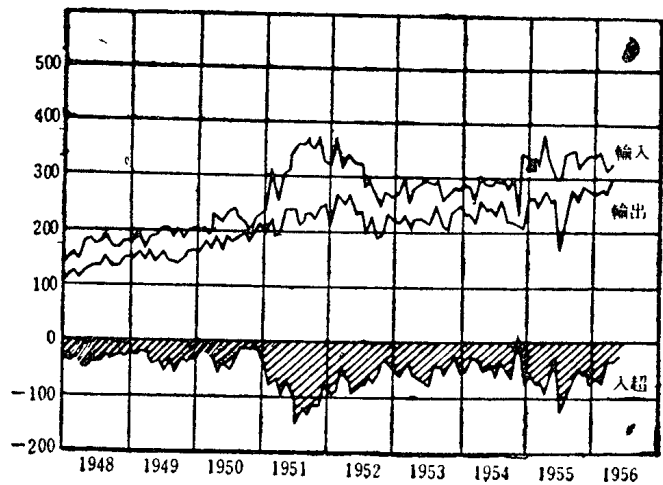


Fig. 2 国際收支の推移 1948~56.
月別 100万ポンド
国際決済銀行 I. B. S. 年次報告・1956.

(二) 一九四六〜五〇年の推移

終戦時、英国は食糧、燃料、鋼鉄、石炭その他の重要資材の不足と輸送難に直面し、労働力の不足と共に国内的にはインフレーションとたたかい乍ら、国際收支の均衡をはかるべく輸出の増進に力をいれた。然し乍ら食糧原料、燃料等の全くの必需品から輸入せねばならぬ英国にとって、世界的に深刻なそれらの不足とたたかいつつ輸入せねばならず、そのため四五年より四六年にかけて輸入は予想されていたほど急速にはのびなかった。そしてまたこれらの諸物資の値上りが英国に波及するには可成りの時間を要したため、英国よりの輸出は英国にとってきわめて満足すべきものであった。(第3

表参照) 即ち四六年の赤字を七億五千万ポンドと見積つた英国にとってこの年の赤字は半分以下という結果であった。(第2表) そしてこの赤字は米国及びカナダよりのクレディットによってまかなわれた。(第4表) かくて一九四七年における白書においては同年の貿易の見通しについて、一般に余り憂慮はしていなかったというる。しかるに四七年に入るや、海外收支は悪化の一途を辿り、そのために通貨準備は枯渇し、四五年十二月の米英金融協定に基づくドル・レディット(三七億五千万ドル)の引出しは極めて甚しく、(上半期に一四億五千万ドル引出し)その上右の協定に基づくポンド自由交換を七月に実施したが、ポンドのドルへの投機取引も加わってポンド危機を招来し、この自由交換性は実施後わずか一カ月で再び停止せられた。これは世界的な物価の値上りの影響が輸入価格に及んできたためであり、し

第3表 輸入および輸出量
(1938=100)

年	輸出	輸入
1945		
第3・四半期	46.2	61.7
第4・四半期	55.8	53.0
1946		
第1・四半期	84.2	63.2
第2・四半期	98.0	68.7
第3・四半期	104.3	70.1
第4・四半期	111.2	72.2

(物価変動を控除した輸出入量を)
(表す指数によって表す)

1947.2. 経済白書

かもその輸入品の $\frac{3}{4}$ が実に食糧、飲料並びに煙草、原料にふりむけられ、加うるに国内における石炭、電力の不足がこれに拍車をかけたのである。

(第5表)かくて四八年には、英国は国内においてはデイスインフレーション政策を行うと共に、輸出製造業者に対しては輸出割当制を行うなどの対策によって、同国の製品の大部分は輸出市場にふりむけられた。この輸出振興策により、輸出の増加率は三八年にくらべて三六%増加し、例えば同年の工業生産指数の対三八年増加率二四%を上廻った。(第6表)またこの年はマーシャル援助が行われ、英国の貿易外收支が増加し、經常勘定

の收支尻は漸く百万ポンドの黒字をみるにいたつたのである。そして四九年には三八年に比して五一%も輸出が増大した。しかるに英国はこの年の九月に所謂通貨の切下げを行い、戦後二度目のポンドの危機をのりこえた。これは同年二月以来、米国の景気が後退し、英国の輸出が伸長したとはいえ、その輸出の地域別分布表をみるならばそれは対ポンド地域に対してであつて、ポンド地域に対する經常勘定の超過額がドル地域に対する不足額の $\frac{1}{4}$ にしかみたくないことをみてもその理由がうなづかれるのである。(第7・8表)ポンド地域に対する輸出の超過はもはや国際的用途に充たされる支払手段をイギリスにおいてはもたなくなつたのである。このようなポンドの切下げは輸出を増大せしめ、五〇年には「戦後はじめて大体からいつて、相当満足すべき国際收支を示すことが出来た。」(五一年経済白書)輸出の前年に對し四億ポンドの増加と共に、輸入もまた四億ポンド増加したが、この増加額は事実上価格の値上りによるものであつた。各輸入数量にそれほど増減はなく、且前年のドル危機に對し、この年はドル輸入を極力抑制した。(第7・9表)

第4表 金・ドル準備の推移 100万ドル

	収支過不足額 (△は不足)	収支不足額補填方法				金・ドル準備の増減 (△は減少)	年・(期末) 金・ドル保有高
		米・加両国による クレディットの買入	国際通貨基金よりの買入	南亞連邦の金貨の付	マーシャル援助		
1945	—	—	—	—	—	2,476	
1946	△ 907	1,128	—	—	220	2,696	
1947	△ 4,131	3,273	240	—	△ 618	2,079	
1948	△ 1,710	356	128	321	△ 223	1,856	
1949							
第1四半期	△ 330	30	32	—	325	1,912	
2	△ 632	30	20	—	340	1,651	
3	△ 539	29	—	—	280	1,425	
4	△ 31	27	—	—	246	1,688	
1949 計	△ 1,532	116	52	—	1,196	1,688	
1950							
第1四半期	40	27	—	—	229	1,984	
2	180	18	—	—	240	2,422	
3	187	—	—	—	147	2,756	
4	398	—	—	—	146	3,300	
1950 計	805	45	—	—	762	3,300	

戦後イギリス経済の成長と循環

The Economist Oct. 6, 1951.

国際決済銀行第20回年次報告 1951.

第5表 イギリスの輸出・入商品群構成状況 100万ポンド 百分比

商品群別		1929	1937	1947	1948	1949	1929	1937	1947	1948	1949
輸 入	食糧・飲料並煙草	535	431	803	883	970	44	42	45	43	43
	原料並に未製品	340	315	567	684	774	28	30	32	33	34
	完成品又は準完成品	334	275	399	486	509	27	27	22	23	22
	その他の輸入	12	7	26	25	20	1	1	1	1	1
総額		1,221	1,028	1,795	2,078	2,273	100	100	100	100	100
輸 出	食糧・飲料並煙草	55	39	65	94	98	7	7	5	6	5
	原料並に未製品	79	65	34	68	82	9	11	3	4	4
	完成品又は準完成品	575	405	1,000	1,377	1,559	69	68	84	83	85
	その他の輸出	20	12	39	43	46	2	2	3	3	3
	再輸出	110	75	61	65	58	13	12	5	4	3
総額		839	596	1,199	1,647	1,843	100	100	100	100	100

国際決済銀行 第20回年次報告 1951.

第 6 表 イギリス輸出量 1938=100

	1947	1948	1949
食糧・飲料・煙草	82	104	111
原料			
石 炭	3	28	37
そ の 他	63	56	63
製 造 品			
金属製品 並に 機械製品	158	200	229
織 維 製 品 衣 料	73	93	99
そ の 他	115	134	140
製 造 品 総 額	124	155	171
イギリス輸出総額	109	136	151

戦後イギリス経済の成長と循環

国際決済銀行 第20回年次報告 1951.

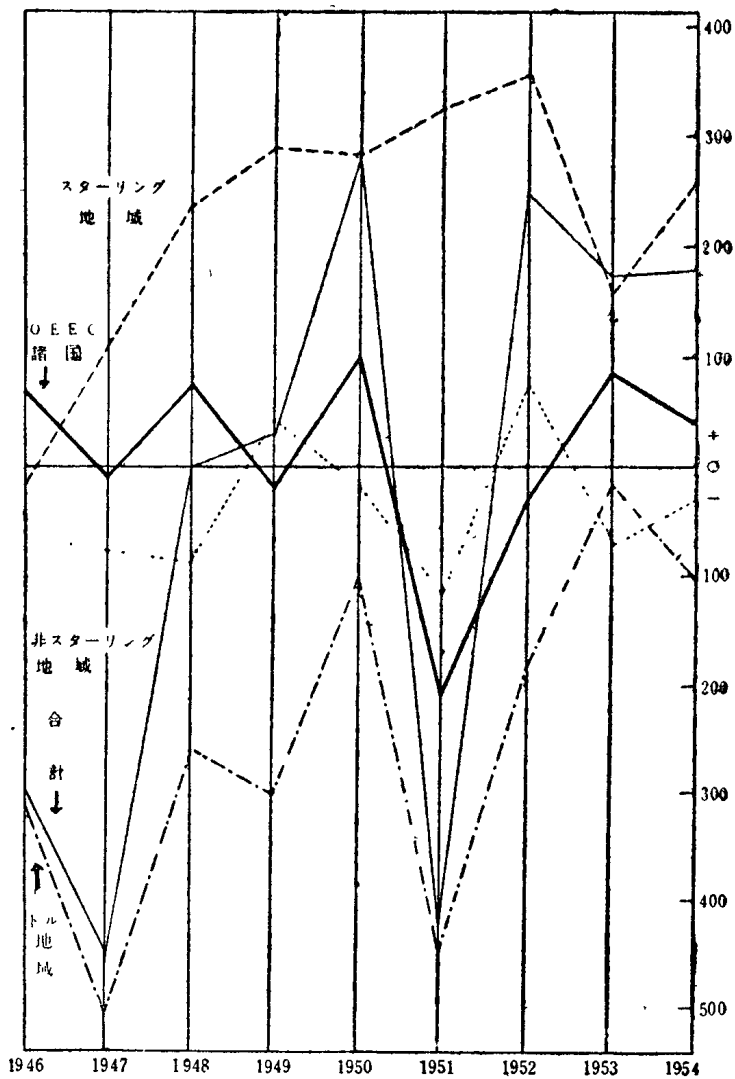


Fig. 3. 1946~54国際収支地域別推移
Britain Official Handbook 1956.

第 7 表 輸 入 地 域 別 分 布 状 況
100万ポンド 百 分 比

年	ドル地域		O. E. E. C 諸 国	その他の 非ポンド 諸 国	R. S. A	合 計	ドル地域		O. E. E. C 諸 国	その他の 非ポンド 諸 国	R. S. A	合 計
	その他の 西半球	その他の 西半球					その他の 西半球	その他の 西半球				
1929	382		377	150	312	1,221	31		31	12	26	100
1937	307		248	157	316	1,028	30		24	15	31	100
1946	390		146	66	384	1,082	9	9	13	7	35	100
1947	567		239	106	494	1,560	36	10	15	7	32	100
1948	409		339	218	661	1,794	23	9	19	12	37	100
1949	442		456	211	764	1,978	22	5	23	11	39	100
1950	439		573	262	949	2,383	18	7	24	11	40	100
1951	742		924	379	1,264	3,491	21	5	26	12	36	100
1952	606		738	271	1,241	2,944	24	3	25	6	42	100
1953	519		678	213	1,323	2,887	18	5	23	8	46	100
1954	565		761	231	1,323	3,009	19	4	25	8	44	100
1955	735		879	284	1,391	3,413	22	4	26	7	41	100

国際收支白書 1956.
国際決済銀行年次報告書 1951.

第 8 表 輸 出 地 域 別 分 布 状 況

100万ポンド

百 分 比

年次	ポンド地域		O.E.E.C	その他のポンド諸国	R. S. A	国際機関	合計	ポンド地域		O.E.E.C	その他のポンド諸国	R. S. A	国際機関	合計
	西	その他半球						西	その他半球					
1929	175		261	93	310	—	839	21		31	11	37	—	100
1937	115		167	79	235	—	596	19		28	14	39	—	100
1946	100	38	262	93	384	40	917	4	4	29	10	42	4	100
1947	130	60	260	135	539	21	1,145	11	5	23	12	47	2	100
1948	196	89	393	169	751	4	1,602	12	6	25	10	46.8	0.2	100
1949	195	108	421	195	921	1	1,841	11	5.9	22	10	50	0.1	100
1950	324	114	596	205	1,011	—	2,250	14	5	26	10	45	—	100
1951	393	114	703	262	1,276	—	2,748	14	4	26	10	46	—	100
1952	410	104	729	259	1,325	—	2,827	15	4	26	8	47	—	100
1953	442	54	757	208	1,209	—	2,670	17	2	28	8	45	—	100
1954	419	58	788	217	1,333	2	2,817	15	2	27.9	8	47	0.1	100
1955	484	55	828	288	1,405	1	3,061	16	2	27	9	46	—	100

国際収支白書 1956.

国際決済銀行年次報告 1951.

第9表 輸入および輸出価格 1950=100

	1949 平均	1950 平均	1950 12月	1951 1月	1951 2月
輸入価格	85	100	113	119	125
輸出価格	94	100	106	107	109

輸入量の分布 100万ポンド

	1948	1949	1950
食料および飼料	826	908	959
煙草	36	49	58
原料	606	687	966
鉱油	127	121	149
機械および車輛	50	55	55
その他	145	151	187
合計	1,790	1,971	2,374

経済白書 1951.

第10表 貿易外勘定取引 100万ポンド

(借方)	1945	1948	1949	1950
海運	190	174	192	198
利子・利潤配当	107	102	104	117
旅行	74	66	73	83
移民送金遺贈等	25	44	27	-1
政府取引	149	87	140	141
合計	545	473	536	538
(貸方)				
海運	271	250	275	311
利子・利潤配当	185	179	191	245
旅行	44	33	44	61
その他 (註)	204	188	209	312
合計	704	650	719	929
貿易外取引	+159	+177	+183	+391

註 石油会社の海外取引 (資本支出以外の)、保険、民間航空、日銭、銀行その他のサービスを含む。

経済白書 1951.1952.

戦後イギリス経済の成長と循環

以上の結果五十年に三億ポンドの黒字を出したのは貿易外收支において、対外投資による収益と五〇年において高価格を示すと共に、生産、売上高が共に増加した石油工業の運営からくる収益が著しかったからであった。(第10表)

かくて英国は五〇年末に完全な支払能力をもち、金・ドル準備も戦後最高となった。米国における景気の回復と共にこの年の半ばにおこった朝鮮動乱のための大規模な再軍備という新規事業を克服して、戦争からの打撃から立直り、英

国政府は一九五一年一月一日からマーシャル援助を停止することに同意した。

(三) 一九五一―五五年の推移

動乱による世界的ブームによつて、輸出が伸長すると共に内需もまた増大したが、英国においては、一九五〇年の間は国内在庫の放出によつてこれに対処し、従つて全面的な輸入の増大となつては表れなかつた。しかるに五一年に入るや、①これらの在庫が放出しつくされ、②この年から発足した国防計画は原料不足に拍車をかけ、輸出向け製品の生産を阻止したため、輸入が大幅にふえ、③他方貿易外收支も減少した。貿易外收支を除いた勘定戻は七億余ポンドの赤字となり、このうち輸入勘定は前年に比し一一億ポンドもの増加であつた。しかしこの増加の $\frac{2}{3}$ は動乱による一般的原材料不足に対する買漁りから生じた、価格騰貴によるものであつた。輸入量は一三%増加したがこれは輸入食料や資材消費の増大というためではなく、前述の如き前年におけるストックが著しく不足したためであつた。(第11表)これに対し輸出額は、四九―五〇年の増加よりもむしろ大きな増加であつた。四九―五〇年の増加が数量の増加によつたのに対し、五一年の増加の大部分は輸出価格の騰貴によるものであつた。そしてこの輸出価格も、特に織物価格の低落が輸出価格騰貴を鈍化せしめた。(第12表)その上、イランによるアバタン製油所の接收と、米国及びカナダへの借款の弁済の開始は、戦後増大してきた英国の貿易外純収入に重大な挫折を生ぜしめた。(第2表)以上の国際收支の動きを地域別にみるならば、(第7・8表)前年において極力抑制したドル地域よりの輸入が増大してポンド地域に対する輸出は増大したが、ドル地域に対しては伸び悩み、逆に輸入品のコスト急騰によつて金・ドル勘定に対する影響は大きかつた。前年にくらべて九億六千五百万ドルも金・ドル勘定は減少したのである。英国はここに戦後最大の危機に直面し、総合的な国際收支改善計画をたてて、この克服に全力をつくした。

第 11 表 輸 入 額 と 輸 入 数 量 の 推 移

100万ポンド

	1951	1952	1953	1954	1955
価額 (c.i.f.)					
A. 食料・飲料並に煙草	1,291	1,206	1,316	1,328	1,445
B. 基礎資材	1,522	1,145	1,054	1,023	1,124
C. 鉱物燃料及び潤滑油	316	339	313	329	410
D. 工業製品	758	769	643	680	894
内訳					
化学製品	112	75	76	102	112
紙・板紙	78	41	35	52	66
鋼	37	116	61	28	99
非鉄金属	160	202	151	174	231
E. その他	15	19	17	14	15
貿易統計に記録された輸入総額	3,902	3,478	3,345	3,374	3,886
保険・運賃・包括範囲及びタイミンクによる相違	(-)411	(-)534	(-)456	(-)365	(-)475
輸入に対する支払額 (f.o.b.)	3,491	2,944	2,887	3,009	3,413
数量 (1950=100)					
A. 食料・飲料及び煙草	110	98	111	108	
B. 基礎資材	104	92	103	102	
C. 鉱物燃料および潤滑油	135	134	147	167	
D. 工業製品	127	123	120	130	
貿易統計に記録された全輸入	113	103	112	114	

第 12 表 輸 出 及 再 輸 出

100万ポンド

	1951	1952	1953
金 属 ・ 機 械	1,198	1,321	1,303
消 費 財	1,035	847	814
そ の 他	347	414	465
合 計	2,580	2,582	2,582
再 輸 出	127	144	105
合 計	2,707	2,726	2,687
包 括 範 囲、時 期 調 整	(+) 39	(+)100	(-) 12
国 際 収 支 統 計 の 輸 出 総 額	2,746	2,826	2,675
輸 出 数 量 (1950=100)	101	95	98

戦後イギリス経済の成長と循環

経済白書 1954.

第 13 表 イギリスの貿易外収支

100万ポンド

	1951	1952	1953	1954	1955
支 出：					
海 運	283	299	245	257	337
利子・利潤及び配当	179	212	212	233	258
旅 行	104	82	89	101	123
移 民 資 金 等	6	6	4	10	15
計	572	599	550	601	733
政 府 支 出	191	217	218	228	241
計	763	816	768	829	974
収 入：					
海 運	422	405	376	407	457
利子・利潤及び配当	304	289	285	306	317
旅 行	75	80	88	95	111
そ の 他	264	249	251	314	234
計	1,065	1,023	1,000	1,122	1,119
政 府 収 入	38	44	60	54	60
計	1,103	1,067	1,060	1,176	1,179
貿 易 外 取 引					
政 府	(-)153	(-)173	(-)158	(-)174	(-)181
そ の 他	(+)493	(+)424	(+)450	(+)521	(+)386
計	(+)340	(+)251	(+)292	(+)347	(+)205

八七

経済白書 1954, 1956.

一九五二年にも尚動乱によるブームは、①米国及び西欧諸国の再軍備支出の増加と、②政府、民間業者等による物資の貯蔵によって支えられていた。英国はしかし前年来の経済危機を克服するため、防衛援助を別としても、総額五億三千三百万ポンドの改善のほとんどを輸入に対する支払額の減少という形で行った。(第14表) このうち原料の輸入は七割、完成財・食料もそれぞれ二割および一割減少した。他方国防計画の一部繰り延べ等によって輸出はほぼ前年の水準を維持し、アバダン精油所の喪失等による貿易外收支の減少があったが、貿易尻赤字は五〇年の半に当る一億余ポンドまで減少して、貿易外收支、防衛援助を含めると二億余ポンドの受超となった。結局收支改善は六億ポンドにもにぼ

第14表 1952年におけるイギリスの国際收支の改善

改善の要因：	1951との相異
輸入に対する支払額の減少	569
輸出からの収入の増加	88
貿易外収入の減少	- 85
改善額 (防衛援助除)	572
防 衛 援 助	117
改 善 総 額	689

100万ポンド
経済白書 1953.

ったわけである。そして、金・ドル準備の流出も五二年の後期には停止し、逆に受超を示したが、五二年末の水準は戦後最高時の五一年六月の半分にも及ばなかった。(第15表) かくて英国は五二年の危機を突破したが、それはあくまで輸入削減による縮小均衡であつて、輸入をふやし、輸出をそれ以上に伸ばす拡大均衡が五三年の課題であつた。

五三年に入るや動乱による世界のブームは漸く下火となり、経済の基調はインフレーションよりデフレーションに向いつつあつた。従つて英国の輸出入及び防衛援助額は共に減少し、僅かに貿易外收支によって受超を維持した。五二年の危機の克服は前述の如く輸入の減少によるものであつたが、この年は輸出が一億五千七百万ポンド(約五・八%)減少したが、輸入の減と貿易外收支の増によって黒字がえられ、輸出がなんの役割をも果さなかつたのが特色であつ

第15表 金・ドル準備

100万ポンド

準備額	1951.6.30現在	1,381
変化額	1951第3四半期	-214
	“ 第4 “	-334
	1952第1 “	-227
	第2 “	- 5
	第3 “	-
	第4 “	+ 57
準備額	1952.12.31現在	659

経済白書 1953.

た。然しこの輸出の中で特筆されねばならないことは、①対ドル地域の收支がバランスしたこと、②O・E・E・C向の收支が受超となったことである。(第7・8表) これらは何れも輸入の減少と輸出の増加の結果であった。また輸入においては、対O・E・E・C地域輸入を五二年の輸入制限に対して二度にわたって緩和し、貿易の自由化率は五八%から七五%にまで回復し、前年の在庫減少等と相俟って輸入数量指数は九%増加した。しかも平均輸入価格は逆に四%の減少のためその金額は減少し、英国にとつてはきわめて有利であったと云うる。従つて金・ドル準備も約七億ドル弱も増大した。以上の如き結果、英国の輸出入は表面にでている数字が示すよりは良好であったのである。

貿易尻の黒字は更に増大し、輸出の収入増は、輸入の支払額の増をやや上廻った。輸出価格は五三年の半ば以来殆ど変化をみせて居らず、輸入価格も五二年以来下落していたが、一二月になつて上昇に転じた。然し総体として五四年の輸出入の増加は、価格の変化というより数量の変化を反映するものであった。この年の輸出の特色は、輸入制限を解除したオーストラリア、ニュージーランドに対する輸出額が大幅にのび、他方対米輸出は減少したことである。(第16表) 又輸入においては食料等の輸入額は殆ど増大せず、基礎物資のそれは、逆に減少した。これは、前者は五三年に五二年に較べて一三%も多く輸入してストックしていた結果であり、後者は国防計画がほぼ完成に近付いたためであった。

第 16 表 イギリスの輸出の地域別分布

100万ポンド

	1953		1954		1955	
	上 期	下 期	上 期	下 期	上 期	下 期
	ポンド地域外 アメリカおよびカナダ その他のポンド地域諸国	161 31	155 39	141 37	140 42	143 37
ポンド地域計	192	194	178	182	180	217
O・E・E・C諸国及びその属領 その他のポンド地域外諸国	344 119	348 131	363 133	359 128	374 149	386 168
ポンド地域外諸国計	655	673	674	669	703	771
ポンド地域 属 領	179 135 81 206	181 178 91 203	169 196 95 211	171 208 85 196	176 208 90 216	206 216 98 221
ポンド地域計	601	653	671	660	690	741
全地域合計	1,256	1,326	1,345	1,329	1,393	1,512

経済白書 1955.

第 17 表 金・ドル準備額の推移(年末額)

100万ドル

	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
準備額	2,696	2,079	1,856	1,688	3,300	2,335	1,846	2,518	2,762	2,120

五五年には、五三、四年の景気後退から回復した米国の経済拡大はめざましく、世界経済は好調を示した。従つて英国にとつては貿易を更に飛躍せしむべき年であつたにも拘らず、国民所得支出額が生産高を上廻り、英国の国際収支は一億ポンドの赤字であり、金・ドル準備は二〇%もの減少を示した。国内においてはこの年に戦後初めて配給制をとい

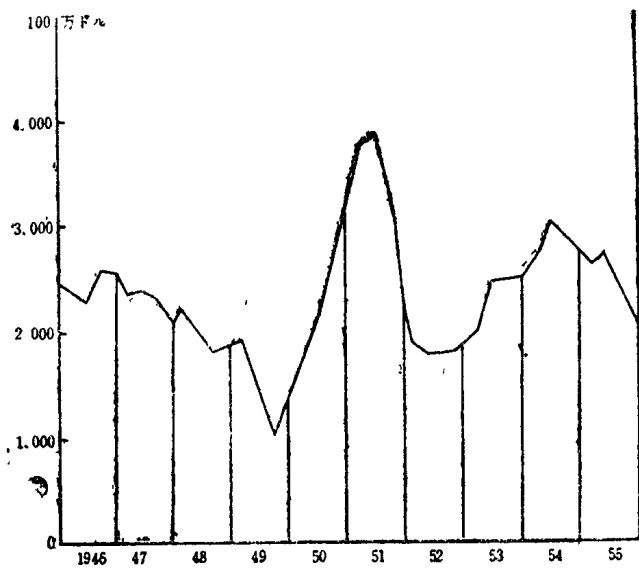


Fig.4. 金・ドル準備の推移
経済白書 1956.

たため、食糧、飲料、煙草の輸入のみで半を占めるに至り、農産物の不作もこれに与つていた。工業用原料及び燃料を中心として、数量で一・五%、価格で一五%の増大であつた。しかもこれらの輸入は、ドル地域から三六%増、O・E・E・C諸国から一七%増、ポンド地域から一八%増によつてまかなわれ、ポンド地域からの増加は五%にすぎなかつた。一方輸出は価格において二%、数量において七%増大したが、世界の需要増加が繊維品以外の殆ど凡ての工業製品に対して、特に金属、機械工業製品に対して及んだのに対し、国内の需要もまた同じ形をとつたことが輸出を十分に伸長せしめなかつた。かくて英国は内において投資以外の需要を抑え、輸出促進のためのディスプレイ

レーション計画に迫られつつ、五六年を迎えたのであつた。

(四) 要 約

以上吾々は貿易收支を中心として戦後の英国経済の変遷をみてきたが、この様に貿易面を重視してきたのは同国の

第 18 表 イギリスの貿易依存度 100万ポンド

	1938	1945	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
輸入額	1,028	1,301	1,798	2,077	2,278	2,609	3,905	3,478	3,343	3,374	3,889
輸出額	532	965	1,201	1,639	1,845	2,259	2,709	2,729	2,688	2,776	3,024
合計	1,560	2,266	2,999	3,716	4,123	4,868	6,614	6,207	6,031	6,150	6,913
国内総生産	5,132	8,624	9,364	10,379	11,099	11,666	12,785	13,861	14,805	15,718	16,784
輸入依存度	20.0	15.0	19.2	20.1	20.5	22.4	30.5	26.0	22.6	21.5	23.8
貿易依存度	30.3	26.2	32.0	35.8	37.1	41.7	51.7	44.1	40.7	39.1	41.2

国民所得白書・国際収支白書 1954. 55. 56より算出。

第 19 表 A 1940年以降の物価およびコストの指数 1948=100

	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1946~1955 の増加率
1.財貨・サービスの輸入価格	81	93	100	102	108	149	143	132	132	137	69
2.生産物—単位当りの国内コスト	90	94	100	103	104	111	122	125	127	130	44
3.最終生産物の価格指数	87	94	100	103	107	119	126	127	128	132	52
4.財貨・サービスの輸出価格	84	92	100	103	100	130	138	130	128	130	55
5.消費者物価指数	87	93	100	102	106	114	121	123	125	130	49
6.暫定小売物価指数	—	93	100	103	106	116	126	130	132	138	—

完全雇用白書 1956.

B 賃金指数 1939.7=100

	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947
全労働者	99~100	103~4	116	126~7	132~3	139	145~6	153	165	173

C

1947.7 = 100

	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954
男性労働者	103	107	109	113	125	132	136	142
女性労働者	103	109	112	116	130	138	143	148
少年労働者	106	110	113	118	132	143	149	155
全労働者	103	107	109	114	126	134	138	146
各年上昇率		4	2	4½	10½	6	3	6

Cole, The Post War Conditions of Britain. 1956.

D 鉱工業生産指数

1948 = 100

	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954
指数	87	92	100	106	114	117	114	121	129
上昇率		6	9	6	7	2½	-2½	6	6½

Cole, Ibidem.

経済の貿易に対する依存度が他の国々—特に米国の一〇%以内と較べると極めて高いからに外ならない。(第18表)しかもその依存度は戦後年々増加し、五一年を頂点として下つては来たが依然として四〇%近くを示し、戦前に較べるならば約一〇%も増加した。従つて戦後におそわれた英国の経済危機が直接国際收支の悪化に起因するものであるのも、十分うなずけるところである。

然しこれらの危機も上述の如く、各々そら性格が異つてすることに注意せねばならない。

戦後イギリス経済の成長と循環

四七年のそれは戦争の直接的な影響の結果世界的に需要の累積と、物資不足から物価が騰貴し、英国の輸入価格は平均約二〇%増加した。然し単にこれだけでなく国内における需要が過大にすぎ、広範囲にわたる所得の引上げが生産高の増加を上廻り、生産コスト、ひいては物価を上昇せしめたのである。(第19表)即ち戦争直後とはいえ、単に対外物価の上昇によるもののみでなく、国内のインフレーションが大きく影響したのであった。

ところが四九年においては、マーシャル援助の結果生産水準は一応戦前の水準に回復したにもかかわらず、米国の景気後退のために特にドル地域に対する輸出が振わず、国内的には労働党政府による諸社会政策費負担、賃銀引下げ困難等により生産コストの引下げは困難となつて、国際收支は改善せず遂にポンドの切下げとなつたのである。五一年においては、朝鮮動乱により再び世界的に原料を中心とする新需要の増加のため、輸入価格が大きく騰貴した。このことは国内における小売価格の上昇をもたらし、賃銀をこれに見合つて増大せしめんとする圧力を生じて、コストを更に高めた。国防計画の推進をもその上加えて、鋼鉄不足が生産阻害の中心であつた。この年の国際收支の危機は五二年において、英国経済を縮少せしめ五一年の危機が英国々民経済に及ぼした影響が最も大きかつたといえよう。

三、国内経済

(一) 石炭と鋼鉄

戦後の英国の国民所得は第一表の如く、年々増加の一途を辿っている。然しその成長率をみるならばそれは必ずしも増大ばかりではない。四六―四七年間と五一―二年間の成長率は極めて低かつた。これらの低率の原因を国内に求めると次の如くなるであろう。戦争直後の経済再建過程に於て、内外経済の基調は、需要が供給を上廻るインフレーション

であった。従って生産物の増加がこのインフレ抑制の為戦時にもまして要請されたわけである。そして四七年の経済危機の国内の問題は、凡て一言にしていうならば石炭に集約された。即ち輸出にせよ、産業再装備、住宅建築、消費物資の供給、輸送等すべての問題は石炭とこれで発生する電力の問題であった。四六年の石炭生産は一億八千九百万トンで

第 20 表 石 炭

	1938	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954
坑 内 掘 堀			187.2	197.6	202.7	204.1	211.9	214.3	212.5	214.9
露 天			10.3	11.8	12.5	12.2	11.0	12.2	11.7	10.1
合 計	227.	189.	197.5	209.5	215.2	216.3	222.9	226.5	224.2	225.0
輸 入			0.7	0.1	—	—	1.2	0.3	0.6	3.0
輸 出 及 外 国 船 焚 料			5.5	16.3	19.4	17.1	11.7	15.1	16.9	16.3

Cole, Ibidem.

第 21 表 A 鋼 生 産 高 の 推 移

	1937	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954
粗 鋼 生 産 高	12,984	11,824	12,695	12,724	14,877	15,533	16,293	15,638	16,418	17,609	13,517
輸 入 高	1,482	173	484	461	502	1,093	556	525	1,774	1,113	488
輸 出 高	2,407	674	2,302	1,733	1,986	2,360	3,153	2,611	2,557	2,756	2,896
生 産 者 ス ト ッ ク 高	—	1,224	1,067	797	805	1,012	959	556	683	962	811
国 内 使 用 高	12,059	12,260	11,831	12,608	13,842	14,606	14,247	14,762	15,938	16,040	16,593

千トン

Cole, Ibidem.

あったが、消費は一億九千四百万トンと貯炭量を五百万トンもこえ、国内消費はほとんど戦前の最高水準に達した。かくて政府は四七年に二億トンの目標をかかげ、労働力を増加せしめ、炭坑の諸設備は優先的に配置せしめた。他方工業用以外の石炭の消費は極端に制限して（特に石油燃料への転換の促進によって）産業の再建をはかったのである。そしてこの様な対策のもとで、石炭業の国有化が四七年に行われた。しかし国有化したということが必ずしも回復を急速に進めたとはいえないかった。かくて四七年には目標の二億トンには及ばなかったが、一億九千七百万トンを達成して全鉱工業生産は六%の上昇率を示したのであった。石炭のみでは四%増加し、復興期に於ては年々増加の一途を辿り（年平均三%の増）、その上四七年よりは待望の輸出能力すらもつにいたった。（第20表及び前掲第6表）

次にこの石炭不足の結果、特に重要資源である鋼鉄は四六年にはその生産を最大に維持することが出来ず、戦前の最高千三百万トンに未だ及ばなかった。（第21表）これは又鉄の輸入の激減という結果でもあったため、輸入の増加をほかり、鋼消費産業の拡充を抑えつつ（これは戦後の全般的労働力不足のため、この労働力を該産業に振り向けるのを抑えた）、鋼の輸出を最少限に抑制して需給の均衡を維持した。鋼をそのまま輸出するよりも、鋼を材料とする完製品を輸出する方が有利でもあった。かくて四八年には戦前の最高額をも超えるに至り、五十年には生産目標の、千五百七十五万トン乃至千六百万トンを上廻る千六百二十九万トンを生産する迄に至った。

ところが五一年に至るや、戦後初めて鋼の生産高が前年を下廻った。即ち前年に比して六十五万トン、四%の減少であった。これは五十年に起った朝鮮動乱のために、世界各国は鋼鉄の買漁りの結果、英国は原料、特に屑鉄の輸入が減少し、その他鉱石、コークスの不足によるものであった。このため五一年末には鋼の甚しい不足状態を示し、このことはこの年に発足した新国防計画に基く軍需産業における需要の増大のために更に著しかった。従って製鋼業者が大量の

第 21 表 B 鋼の供給および原料の消費 100万トン

	1948	1949	1950	1951	1952
原 料					
銑鉄及合金鉄	9.28	9.50	9.63	9.67	10.53
製鋼用消費					
銑 鉄	7.07	7.09	7.43	7.79	8.49
屑 鉄	9.05	9.78	10.25	9.12	8.93
鋼供給量					
粗鋼生産高	14.88	15.55	16.29	15.64	16.14
輸 入	0.53	1.14	0.58	0.56	1.82
粗鋼総供給量	15.84	16.98	11.45	17.42	18.23
国内供給	13.83	14.57	14.20	14.75	15.62
輸 出	2.01	2.41	3.25	2.67	2.61

経済白書 1952. 1953.

第 22 表 登録失業者率

	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952
失 業 率	1.2	2.4	3.0	1.7	1.5	1.5	1.2	2.0

Robinson, Industrial Fluctuation in the U. K. 1955.

手持屑鉄、及び銑鉄を放出しなければ生産は更に低下したであろう。貿易収支上の危機は国内産業の面では右の如く表われ、これは更に鋼材使用の諸産業に及び、この年の鋳工業生産増加率は、四九〇五年の七%から五〇一五年には二・五%減少した。五二年に入つて、年初には生産はまだ遅滞していたが、年央までには生産率は前年同期のそれを超え、特に銑鉄生産の著増と輸入の増加で改善されていったのである。

第23表 鉱工業・生産雇備・一人当り生産高指数

	生産高	雇 備	一人当り平均生産高
1948	100	100	100
1949	106	102	105
1950	114	103	110
1951	117	106	111
1952	114	105	108
1953	121	106	114
1954	129	108	119
1955	136	111	123

経済白書 1956.

(三) 物 価

戦後の物価およびコストの変化の推移は第19表に示したところであるが、あらゆる種類の財貨・サービスの最終価格はおよそ五〇%上昇を示した。この変化の及ぼせる主たる原因は勿論、輸入価格と国内生産コストの動きであった。特に輸入価格は約七〇%の上昇を示しているが、これはひとつには四九年のポンド切下げの結果のためである。

(二) 雇 用 と 生 産 性

大戦前における英国の年平均失業率はほぼ十%強であった。然し戦後は深刻な労働力の不足にみまわれ、四六年の対三九年の水準に達するに必要な労働力の増加率は尚二二%も要していた。したがって戦後は失業率は三%をこえたことがない。(第22表) また労働者の生産性をみるならば(第23表) 五二年において、鉱工業生産が三%減少したのに雇用は一%の減少しかなく需要と生産高水準が低下するに至った以外は年々増加を辿っている。

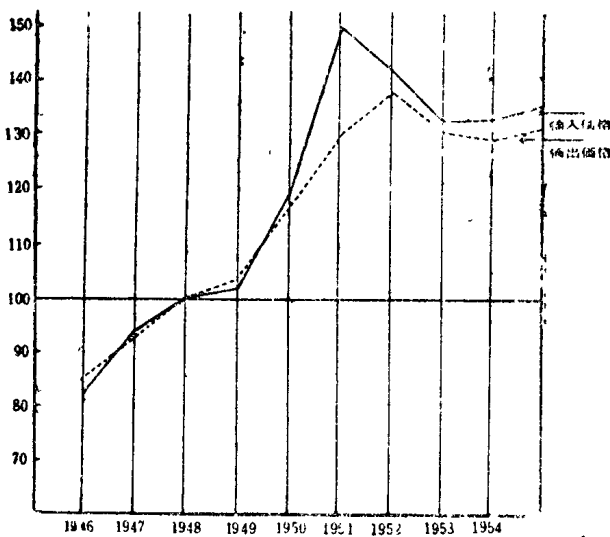


Fig. 5. 輸出入財貨・サービス価格指数 1948-100.

第24表 海外投資残高
100万ポンド

	1938	1945	1948
ポンド地域	1,499	967	898
ドル地域	680	296	243
その他の	1,366	1,154	826
計	3,545	2,417	1,967

(Bank of England)

つた。然し注意せねばならぬことは、この輸入価格が騰貴した場合それが単に国内価格水準を上昇させるのみでなく、所得増大への圧力をも生ぜしめて、輸入価格が価格水準へ及ぼす直接の影響をさらに大幅にしていることである。(特に五一年)そしてさらに、英国の物価騰貴は最初の復興期のために、次には朝鮮動乱と関連する世界の状況によるものであった。そうであるにせよ英国は所得の増加が生産高の増加を上廻る傾向が強く、ほぼ完全雇用に近い状態に近いとは云い乍らつねに物価上昇の気配を示しているといっているのである。

A、投資 (四) 資本形成

戦後の英国の資本形成の問題をみる場合、戦前に比して目立つのは国内投資の比重が高まり、海外投資のそれは減少していることである。(第24表)そしてこの国内資本形成の推移は第26表に示された如くであつて、国民支出の中でしめる割合は、国際收支が赤字で所謂危機の時、五一年に一番大きく、逆に黒字といわれた五〇年、五二年に小さいことが注目される。そこでこの国際收支と投資との関係をみるために、資本形成をさらに粗固定投資と在庫投資にわけてみよう。

一九五一年に、資本形成額は十億ポンド増大しているが、第25表におけるが如き、一九五三年の価格であらわした実質粗固定投資額をみてみるならば、五一年にはむしろ逆に前年にくらべて減少している。そうすると五一年の市場価格における粗投資の増大は、在庫投資の増大と資本財価格の騰貴によるものであることがうかがわれるの

である。さらにこの固定投資のなかで特徴のある面は、住宅の新築に対する投資であって、就中朝鮮動乱以後の増加はとくに著しい。五二年においては他の固定投資が減少を示しているのに対してひとり住宅新築のみが増加を示し、また五二年と五三年間の固定投資の増加額の中で住宅新築は実にその半ばを占めている。動乱以後の生産増加が、国防計画とこの住宅建築の急激な増大によって支えられていたといっても過言ではないであろう。更にこの在庫投資をみるならば、国際収支が黒字となった五〇年には在庫は激減し、逆に収支の悪化した五一年には急増し、危機を脱した五二年に再び在庫の食いつぶしを行い、五五年の悪化した年はまた増加するという極めて顕著な動きを示している。(第6図参照)即ち、戦後英国経済の歩みにおいて、輸入の削減に基く縮少均衡をなした五二年には、鋳工業生産をはじめとして経済の規模が縮少を示したが、他の年度は程度の差こそあれ、上昇のみであった。しかしこの在庫投資のみは国際収支の動きに極めて敏感であって、その動きもほぼ一年毎に交互に上下している。戦後におけるサイクルを示すならば、この在庫投資の動きのみというるのである。そしてこの様な在庫投資の動きはとりもなおさず英国の国際収支の変動に

第 25 表 資産種類別粗固定投資

1953年価格 100万ポンド

	1949	1950	1951	1952	1953	1954
機械	353	338	300	267	323	359
航空機						
船舶						
船舶・航空機						
設備	720	796	840	801	833	853
工場						
住宅	410	397	401	489	619	631
その他	502	559	529	524	549	606
合計	1,995	2,090	2,070	2,081	2,324	2,449

第 26 表 A 国民支出の構成推移

100万ポンド

	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
市場価格による国民支出	9,826	10,564	11,709	12,448	13,256	14,599	15,732	16,756	17,824	18,908
消費者支出	(72.5) %	(74.5)	(71.7)	(70.7)	(70.9)	(69.2)	(67.2)	(66.7)	(66.7)	(67.0)
財貨・サービスにたいする政府支出	2,291	1,742	1,761	1,977	2,067	2,439	2,893	3,054	3,137	3,198
国内粗資本形成	(8.0) %	(13.7)	(13.4)	(12.9)	(11.1)	(16.7)	(13.4)	(14.5)	(14.6)	(16.5)
	786	1,446	1,571	1,609	1,471	2,435	2,109	2,436	2,601	3,120

国民所得白書 1955. 1956.
外国経済統計年報

B 資本形成の推移

	住宅新築含まず		住宅新築以外の資本形成							
	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955		
固定資本投資	1,396	1,544	1,350	1,488	1,570	1,680	1,828	2,144		
在庫投資	175	65	-210	575	50	125	125	350		
住宅新築			331	372	489	625	648	626		

国民所得白書 1955. 1956.

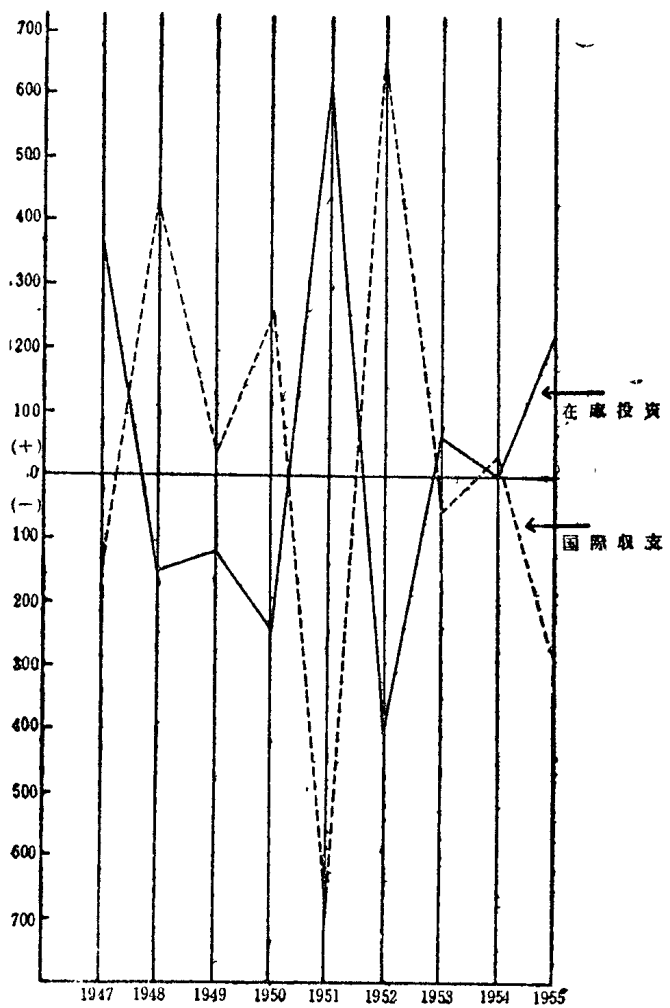


Fig.6 在庫投資と国際収支の変動 (百万ポンド)

住友銀行・調査月報の調査による。

(第28表) このことをまた個人の貯蓄率の面からみるならば、国民総支出の中における消費支出が減少を示してきた五年頃より、個人の貯蓄性向も増加を示しておいて、一応五〇年頃より経済復興が達成されると共に貯蓄をなしうる余裕をえてきたものと思われる。(第29表)

更に五一年頃までは海外からの資本のトランスファーがあり、これのなくなった五二年から個人の貯蓄が急増という相補う形を示してきた。

(五) 金融

戦後における英国の通貨の供給総量は年々増加しているが、国民総生産高もまた増大しておいて、後者に対する通貨

対して、国内における調整的役割を果していることを示しているのである。

B、貯蓄

次にこれら投資面に対する貯蓄面は如何に推移していったかは第27表に於てみる事が出来る。そしてさらに個人と会社および公社の貯蓄の推移をみるならば、一九五〇年頃までの経済復興過程においては個人の貯蓄の額は極めて小さく、五二年から急速に増大してきたことが目立っている。

第 27 表 海外投資以外の資本形成内訳

100万ポンド

	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
粗固定資本形成								
個人・会社および公社	905	1,046	1,143	1,236	1,307	1,486	1,716	2,085
中央政 府	105	111	126	161	210	213	154	188
地方政 府	386	387	412	463	542	606	576	497
総 額	1,396	1,544	1,881	1,860	2,059	2,305	2,476	2,770
在庫品・仕掛品の物量増加額								
個人・会社および公社	237	112	2	500	-26	74	245	471
中央政 府	-62	-47	-212	75	76	51	-120	-121
総 額	175	65	-210	575	50	125	125	350

経済白書 1954. 1956.

第 28 表 貯蓄内訳〔政府資金・配当・利子等を除く〕

100万ポンド

貯蓄								
個人	109	147	100	252	785	935	892	962
会社および公社	939	1,019	1,346	1,310	1,044	1,192	1,580	1,735
海外からの資本トランスファー	138	154	140	43	-	-	-	-
海外政府からの資本贈与	96	35	27	35	35	43	25	23
その他の政府受取								

全 上

第29表 個人貯蓄性向 100万ポンド

	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955
個人所得	9,903	10,488	11,031	12,089	12,986	13,753	14,580	15,688
個人可処分所得	8,539	8,973	9,500	10,370	11,364	12,120	12,785	13,654
個人貯蓄	109	147	100	252	785	935	892	962
貯蓄性向	1.3%	1.6	0.9	2.1	6.0	6.8	6.1	6.1

経済白書 1954.1956.

戦後イギリス経済の成長と循環

第30表 国民総生産高と通貨供給量

	通貨単位(千億)			国民総生産高に対する百分率	
	現金通貨流通高	通貨供給量	国民総生産高	現金通貨流通高	通貨供給量
1938	0.46	1.64	5.76	8	28
1946	1.38	4.96	9.95	14	50
1948	1.25	5.13	11.83	11	43
1949	1.27	5.19	12.56	10	41
1950	1.29	5.28	13.26	10	40
1951	1.36	5.36	14.60	9	37
1952	1.45	5.38	15.73	9	34
1953	1.53	5.53	16.76	9	33
1954	1.62	5.72	17.82	9	32
1955	1.73	5.70	18.91	9	30

国済決済銀行年次報告 1956.

供給総量の割合は四六年をピークとしてむしろ減少し、五五年のそれは戦前のとほぼ同程度にまでなっている。(第30表)

ところで五一年以来、英国の金融政策はイングランド銀行の公定歩合を積極的に運用することによって大きな効果をあげてきた様に思われる。戦後膨張を続けてきた銀行貸出はやはりインフレの一要因であつた。五一年の国際

收支の悪化と再軍備計画によつて、この要因は更に大きくなるため、この年公定歩合を二%から四%に引上げ、金融政策は引きしめに転じた。(第31・32表) 五年の貸出は減少を示している。

第 31 表 金 利 表

	イングランド銀行 公定歩合	銀行予金率 %	公共事業局 貸付率 %	市 場 利 率		
				3ヶ月物 大蔵省証券 %	3ヶ月物 銀行手形 %	3ヶ月物 優良商業手形 %
1950	2.0%	%	%	%	%	%
1951	2.0					
1952	4.0	2.0	4.25	2.31	3.0	4~5
1953	4.0	2.0	4.25	2.38	3.0	4~5
1954	3.5	1.75	4.0	2.06	2.12	3~3.5
1955	4.5	2.5	4.0	3.91	3.94	4.25~4.75

国際決済銀行 年次報告 1956.

第 32 表 ロンドン交換加盟銀行の預金および資産 100万ポンド

	純 預 金	現 金 及 コ ー マ ネ	大蔵省証券	商業手形	投 資	貸 出 其 他 所 定
1951年12月末日	6,036	1,129	893	181	1,965	1,931
1952年12月末日	6,155	1,078	1,182	66	2,148	1,749
1953年12月末日	6,370	1,043	1,338	79	2,275	1,707
1954年12月末日	6,558	1,069	1,199	114	2,353	1,897
1955年12月末日	6,261	1,071	1,271	129	2,016	1,851

経済白書 1955. 1956.

そうしてこのことが前
述せる在庫投資の減少
を導き、ひいては五二
年における国際収支の
改善と結びついている
と考えられる。五三年
には歩合は前年と同じ
であったが、五四年は
三・五%にさげられ貸
出しは再び大幅に増加
した。而して一般会社
利潤も増加を示し、五
二年にみられた如き在
庫投資の減少をみるこ
となく国際収支は黒字
を示した。然し五五年
には再び金融は引きし

第 33 表

1953~55における支出と供給の変動

(100万ポンド 1954の要素費用)

支 出	変 動		供 給	変 動	
	1953~54	1954~55		1953~54	1954~55
消費者支出	+ 440	+ 290	国内総生産高	+ 690	+ 525
公共機関支出	- 25	- 55	輸 入	+ 150	+ 350
総固定投資					
(a) 新規住宅	+ 30	- 50			
(b) その他の固定投資	+ 150	+ 235			
在庫仕掛品投資	-	+ 210			
輸 出	+ 245	+ 245			
支出の総変動額	+ 840	+ 875	供給の総変動額	+ 840	+ 875

住友銀行の調査月報による。

戦後イギリス経済の成長と循環

一〇六

めに転じ、公定歩合も四・五%へと一%上昇し、ロンドン交換加盟銀行の貸出・投資共に減少を示した。ところがこのような減少にも拘らず五五年には在庫投資が減少しなかったのは、五四年においては鉦工業の生産が七%ものびたのに対し輸入量が一%しか増加しなため在庫の喰潰しがあり、次に世界的な好況に刺戟されて在庫を増大せしめ、鉄道等のストがさらに在庫蓄積に拍車をかけたためであった。

然し乍ら何れにせよ英国の金融政策は金利を極めて弾力的に動かすことよって、完全雇用とはいいいながら、超過需要によるインフレーションの危険を伴っている国内経済と、逆調になりやすい国際收支の健全性保持のため、少くとも一九三〇年代の当時よりは極めて大きな成果をあげているといえよう。

四 結 語

以上吾々は英国經濟の戦後の推移を概観したが、これをみても戦後の英国經濟は戦前の如き明瞭な景氣波動は、一年毎の極めて激しい在庫投資の変動を除いては十分に示しては思われぬ。そして成長のみが五二年の後退を除いて順調に示されている。これは戦争の直接的影響による国内經濟再建と、朝鮮動乱に基く国防計画の推進といういわば特殊事情による条件によって強く維持されてきたためとみられうる。従つてこのような事情から戦後の英国經濟の本質が循環なきものであるなどは容易に判断することを許さねいであらう。

前述の如く一九五五年は世界經濟は好況を示した年であつた。貿易に依存することの大きい英国經濟がしかるに逆調を示し、一億三百万ポンドもの赤字を示したことは、主として左の如き国内經濟の動きによるものであつた。即ち①国内の生産高の増勢が鈍り逆に、②国内需要の増大によるものであつた。(第33表)第一の主原因には労働力の不足と増産のための設備能力に限界を生じた事をあげうる。また第二の主原因には特に固定投資に対する政府の投資奨励策や政府支出の増加をあげるのであるが、このように国内經濟の要因が強く作用してきたことは注目されねばならないところであらう。動乱等の外的要因による波動も漸くおさまってきた五五年後の動きこそ英国經濟の本来の姿を示すものとして大いに注意されねばならないところであらう。

(註)

以上の研究は、英国において年々発表される經濟白書、國際収支白書、國民所得白書、完全雇用白書、財政説明書を参照した。

これらは大蔵省調査月報に負うところが大きであった。その他に、

Annual Abstract of Statistics.

'Britain' Official Handbook.

Bank for International Settlements の年次報告書。

G. D. H. Cole, The Post-War Conditions of Britain. 1956.

P. W. Bell, The Sterling Area in the Post-War World. 1956.

E. A. G. Robinson, "Industrial Fluctuation in the United Kingdom 1946~52," in The Business Cycle in the Post-War World. ed, by Lundberg. 1956.

'United Kingdom' by O. E. F. C. の年次報告書。
Economist.

を参考にした。又、日本銀行、住友銀行の調査月報をも参照した。尚、各年の白書の図表の数字はあとに発表されたものを使用した。後年において不詳のためやや一致せざる点のあることをお断りしておく。

本調査に当って関係連の信江氏に数々のお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。